

Title	タブーの社会学
Sub Title	The sociological analysis of the phenomena of taboo
Author	内野, 久美子(Uchino, Kumiko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1975
Jtitle	哲學 No.63 (1975. 2) ,p.89- 105
JaLC DOI	
Abstract	The phenomena of taboo is an inevitable product of the culture which has an integrated poit of view. The objects and actions regarded as taboo are deeply related to the orthodox and normal behavior of the society, although they are always believed to exist exterior to the daily life in the society and of people's consious perspectives. Emotionally people behave as if taboo objects did not exist and avoid them carefully, never, confronting them objectively. However, once a taboo is broken, new spheres of realite in the universe appear in front of them. People can not help but be overwhelmed and their firm belief and the established horizon of the world at once collapse. If one accepts this new dimension which was formerly refused, its acceptance induces the reformation of the world. In the transition of an era, taboos are easily and intendedly broken. They are discussed in public or made use of as ritual propaganda by revolutionaries. The breaking of taboos and the resultant mental instability and emotional confusion are frequent tactics used for or against maintaining the rigid order, of the regime. It is very meaningful to analyze the interrelation of taboo and social structure and its influence on people's consciousness, for it enables us to approach a total understanding of the world in which we live, In primitives societies, something abnormal and contradictory to the secular order is regarded as sacred and as belonging to another world. The structural contradiction of the society is never questionned and is placed in a spiritual realm guaranteed by people's avoidance. Taboo phenomena, accompanied by this emotional avoidance, functions to stablize the present social order. The phenomena of taboo is the dogmatic procedure to provent the exposure of the dificiency of a world view by giving it religious value. Taboos were considered very religious matters and even today are discussed on a moralistic level. This means that they do not allow people to question their validity, but force them to believe in a fiction that gives rigidity to their society.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000063-0089

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

タ ブ ー の 社 会 学

内 野 久 美 子

人は経験を通して社会や人間関係の触れてはならぬ部分を学び、それを侵さぬように自らの行動を規制する。この暗黙の了解が異常な状況や部外者の不注意な振舞によって破られた時、世界はその姿を一新し、そこに顕れる^{リロリテ}真実は人々を混乱に陥れ又圧倒する。しかし、人は何がタブーであるかを熟知しながらも、経験的なるが故に何故そうであるかを問う事は無い。けれどもタブーとされるものも又現実の一部であるのなら、何故それが隠され避けられねばならないかを問うて見る必要がある。タブーは、社会が一つの統一した世界観を持つものである限り発生し、その崩壊を防ぐために注意深く葬りさられた現実の一部である。それを排除する為に特別な儀礼や制度を設ける場合もあれば、感情的忌避行為を持って遠避ける事もある。タブーは世界観の虚構性をあがなう真実として存在する為それが露にされる時は、厳粛さという一種の宗教感情を招来せずにはいられない。又、人々の世界観やそれを支える社会構造が変化する時、タブーは恣意的に触れられる。それによって生のアナーキーな現実が姿を現わし、そこから新しい世界が創り出されるのである。

人類学者によって数多く報告されているタブーの公約的定義は、「それに触れると何らかの罰が自動的に降りるものであり、宗教や呪術によって課せられた禁止⁽¹⁾」である。代表的なものは、月経の血、新生児・胎児・死体・ある特定の動物等であり、それ等は普通余りにも畏れ多く尊いものと、口にするのも憚られる不潔な汚わいの二種に分けられるが、未開社会では区別される事なく、危険なものと言う一つの範ちゅうにまとめられている。この危険なものとその社会の秩序の関係は、多くの場合その社会の

者には明確に理解されていなか、又は彼等の世界観の虚構性にのっとった意識的な解釈が附せられているかである。このタブーを生ぜしめる社会の背後の力関係やタブーに対する人々の心理的態度の分析を、つづつ行って見よう。

マージナルなものとしてのタブー

タブーとされるものは、現実としてどんなに身近に存在しようとも、一個の人間のパースペクティブの最も周辺的部分に位置付けられる。又社会体系の中においては、一つの系と系、あるいは集団と集団の接点、ある原理の貫徹を阻む例外や矛盾点等、一つの体系の極限に生じる。この世界観の仮説性と現実のきしみにタブーが生じる点についてはエドモンドRリーチが、分類秩序を困乱させるものとしての観点からの分析では、メアリー・ダグラスが注目される。リーチは、タブーを「物と物の間をつなぐ事の禁止」と考え、軽蔑やののしりに使われるタブーの言葉は、孤立している物と物の間隙につけられたものであり、一端タブーが唱えられれば、その溝は埋まり非連続的な個体は結合し、個体の持っていた意味や世界は瓦解し無に帰する事を指適した。リーチは、動物名を使ったタブーの言葉を調べ、人々の身近にいる動物には、軽蔑と猥せつが、遠いものには権威と怖れが与えられる事を述べた。(例 a son of Bitch—a son of lion)⁽²⁾。近いタブーは、実現可能性が高く、実現した場合その状況はあい昧な両義性を持ち(例)人間でも動物でもない)、過剰な反社会的連続性によって社会を混乱させる。一方遠い異質な世界に住む野生の動物に権威の様な積極的価値が与えられるのは、隔絶したものを連なげる媒介性の面が評価されると考えられる。タブーは、何を関連づけるかによって、その価値が決まりそれはその社会の物事の分類の秩序に基く。リーチと同じく、ののしりとタブーそして、社会の関係を扱っている例がマリノフスキー調査報告に見られる。マリノフスキーは、トロブリランド島民の、ののしりや軽蔑の効力について、ののしり言葉と現実が近いもの程その効力は強い事を指適した。トロブリランド島では相手を侮辱する言葉に、母との性交・姉妹と

の、そして妻との性交をほのめかす言葉があり、その侮辱の度合は、母・姉妹・妻の順でその強さを増す。最大の侮辱は「お前の妻と寝ろ」と言う言葉であり、トロブリアンドでは、兄弟姉妹のインセスト・タブー程ではないが、夫婦間の性的緊密さは厳格な作法によって隠されているとマリノフスキーは報告する⁽³⁾。すなわち汚名が現実に近い程侮辱の度合は大きくなり、これをマリノフスキーは、ののしり効果は欲望や行為の現実性すなわち、もっともらしさとそれに対する慣習的な抑圧との間の関係によって決まると述べる⁽⁴⁾。リーチやマリノフスキーの報告は、タブーというかき根が取り払われた時、隔てられていた内容が現実に近い程人々の困惑や情緒的緊張は強く惹き起こされ、日常の秩序の侵害であればある程人々の反発を招くという事を示す。タブーという禁止は、人々がそれによって何を避けて通っているかによって、その強さも評価も異なるが、中でも人々の生活の最も恒常的な部分にとって矛盾となるものや行動に最大のタブーが課せられる。しかし、余りにも日常的な不文律は情緒的あるいは無意識的な習慣性に取りまかれている為、何故そうであるのかが問われる事はない。

メリー・ダグラスは、このタブーと体系の問題を、レビ記の動物のタブーを取り上げて説明した。ダグラスは、未開社会での重要な行動の基準となる「けがれ」がバラバラな孤絶した事象ではなく、常にそれは人々の意識の体系性からはみ出た期待されぬ結果としてそこに生じるものであると指適した。ヘブライの宗教ではラクダ・豚・野兎・鳥・蛇等は食物として又接触する事のタブーが課せられているが、それ等は宗教的意味において悪であったのではなく彼等の自然界の分類秩序に当てはまらぬ例外性を備えているか、又は各カテゴリーの特性を兼ねているからである⁽⁵⁾。彼等を食べる事は、人々の食生活のきまりを混乱させる事になり、行動の基準を崩壊させる事につながる為、その動物達は輕蔑を持って忌避される。彼等は明らかに体系を脅かす矛盾であり、彼等を認める事はその体系の存立す

る意味を失わせる事になり、体系の崩壊につながる。

リーチはタブーの背後に現実世界との距離の問題がある事を発見したが、ダグラスは、タブー背後に次の四つの危険の型がある事を指摘する⁽⁶⁾。(一)外的境界線に迫る危険(二)内的境界線の侵犯から生まれる危険(三)境界内部の辺境に宿る危険(四)内的矛盾から生ずる危険、すなわち基本的原理が他の基本原理に否定されその結果体系自体が自己と戦う様に見える危険である。具体的に言えば、(一)はその社会と別種の世界、例えば霊の世界や他部族との関りがタブーの中に見られる場合である。マナを持つと信じられるポリネシアの尊長はこれに当たる。(二)は二つの構造の間隙に住む人々が持つ危険で、母系社会における父、父系社会における母の兄弟等である。合法的な部外者に寄せる人々の不安が、情緒的忌避を伴うタブーを生ぜしめる。(三)は社会体系の不明確な区域から発し無意識に悪をなす力と信じられる部分である。例えば、マンダリ族社会の様に、戦争捕りよを主とするれい属民が、人々に対する嫉妬から無意識に妖術をかけると信じられている場合等である。(四)は同等の力を持つ二つのシンボルの存立、母系・父系集団の共存等に見られよう⁽⁷⁾。

このダグラスの分類は社会体系とタブーが生じる位置の問題を基礎にしたものであるがこれを力のメカニズムを軸にして整理すると次の様な二つの形になる。(一)力関係の強弱が非常にはっきりしている場合。原則と例外の関係。例外は原則の不完全なものと考えられず、異質なものとしてタブー視される。日蝕・月蝕・小人・不具者等。(二)同じ程度の原理や力が存立する場合。タブーは主にこの二つの力が接触する点に発生する。例えば、夫婦の両親に課せられた沈黙の関係(話す事のタブー)又は極端なまでの尊敬を示しあうアンダマン島の風習等がそれに該当する。(三)全く異質な世界が共存し合う場合。カオスとコスモスの併存やマナの世界と俗の世界が同じウェートで人々の世界観に位置を占める時、異質な両者同志が互いにとってタブーとなる。この一つの立場や力の波及、原理の貫徹によって、矛

盾として登場する異質なものとマージナルなものの存在は、その世界への危険な挑戦となるが故に一方的に抑圧排斥される場合と、このマージナルなものや対立する力の異質性を強調する事で、力の表面的対立を防ぎ、かえって社会体系の安定を強化する場合の二つが見られる。タブーの対象となっているものに、豊かな情緒性が与えられていたり、又タブーに対する人々の態度に、極度の情緒的忌避や緊張が見られるのも社会体系の均衡を崩壊させない一措置である。例えばマリノフスキーの報告によれば、トロブリンド島の母系社会では、子の出生の際の父の生物学的役割は知られていないにもかかわらず、子供の顔は父に似るという社会的教義が信じられている。これは、妻の兄弟の権威的態度と異なる父子の緊密な情愛関係の結果と考えられている。この教義に疑問を投げかけたり反対を唱える事は、決して許されない⁽⁸⁾。この教義は、母系原理にとっては矛盾であるが父系を守る為の一つの支えであり、父系社会における母子、母系社会における父子の様に傍系者に情緒的・霊的優位性が与えられている報告は、各地に見られる⁽⁹⁾。これは社会の力関係を直接露呈させる事なく、一方の側に異質なものを与える事によって秩序安定を図る事である。対立し合う力の接点に制度として情緒性が設置され、社会の構造安定に積極的に貢献する例は、ラドクリフ・ブラウンの報告する冗談関係である⁽¹⁰⁾。

冗談関係とは、二つの対立しあう集団間において伝統的に設置されたからかいやいたづらをし合う関係である。ラドクリフ・ブラウンによれば冗談関係には互いに行なう場合と一方通行の場合があり、相互的な例としてはドゴン族の男と妻の姉妹やその娘との間、別のクランの同じ日に生まれた少年間に見られる。アンダマン島では、夫婦の両親、嫁と夫の両親は、口をきいてはならず互いに避け合う。しかし彼等は媒介者を通して贈り物を頻繁に交わさねばならない。ラドクリフ・ブラウンは、これを、沈黙による忌避・極端なくらいの尊敬の表現・うわべのからかいやふざけによるけなし合いは、集団内の最も摩擦の生じやすい所に設けられ、真の対立関係を露

呈させない措置として機能すると指適する。不平等な冗談関係は、さらにはっきり社会の階層性が現れる。東南アフリカのトンガ族では、おいは年少でも母の兄弟を一方的にからかう。トンガ族は父系社会であり、父と父の姉妹（^{フイ・メール・フアザー}女の父）は絶対的に優越しており、母方の叔父は「^{メール・マザー}男の母」と呼ばれ、叔父とおいは孫・祖父と呼び合う。叔父はここでは、社会生活の主体者としての権威を認められていない、チエロキー・インディアンにあいても、父系の者は皆父と呼ばれ尊敬されるが、父の姉妹の夫には別の呼称が与えられ、ego は一方的に冗談をしかける権利を持つ。彼はその社会の権威支配体系にとって、マージナルなものであり、他系の者として（集団の接点に位置する。この系の貫徹の際の矛盾となる部分、最も緊張の高まる点に冗談というインフォーマルな、異質な力を作用させる事で、対立は回避される。又構造的優越者から構造的劣等集団に向けられるからかい、不平等関係維持の意志がこめられた優位集団の力のシンボルとなり、社会の階層関係を維持する機能を持つ⁽¹¹⁾。社会において、一つの原理が貫徹し得ない集団やそれを代表するものに接した場合、対立を回避する為そこに情緒的・霊的優位性の様な異質な力を与える事は、社会的平衡を維持する事にもなるが又、集団そのものの成立基盤の矛盾や関係をカムフラージュする事にもなる。特にこの異質性や矛盾の場が宗教的力を帯びる時、未開社会本来のタブーとなる。タブーは、一つの系で一貫出来ない部分を、その部分性を明らかにする事なく他の異質の原理で解釈し、矛盾処理を行なう事で、秩序の安定を図る為に設けられた一つの^{ポリシー}策である。

タブーの力と内的特性

個別の社会や世界観という通時的な観点から視点を移し、共時的・構造的な観点でタブーの問題を考えると、ヴィクター・ターナーのコミュニタス論が注目される⁽¹²⁾。コミュニタスとは、社会秩序や社会構造に対する反対概念であり、社会の構成原理に対するアナーキーな状況という意味である。社会制度に捉われないアナーキーな状況においては、人は異質な価

値や人間関係、時間を経験するとターナーは述べる。彼は通過儀礼に見られる分離・移行・合体の三つの相の中で特に移行期に注目し、その極限状況内の諸特性は、単に宗教儀礼の中でのみ見られるのではなく、他のあらゆる社会関係の中にも存在する事を指摘した。彼のコミュニタスの概念は、常に秩序維持や社会体系に主眼を置いて、二次的に考えられて来たマージナリティの問題を、マージナルなものの持つ特性という形で、そこに重点を置いて見直した点から導き出されたものである。コミュニタスは、(一)構造と構造のすき間に落ちこんでいる事(二)極限の境にいる事(三)最も低い梯子段を占める事(弱者、劣等者の意)の三つの特徴を備え、主に一時的なものであるが、ある一部集団においては「弱者の力」として永続的に見られる事もある。又一時的・少数集団である事を止め全集団に及ぶ時は、千年王国運動とし現れ、通常は、宮廷の道化師・聖なる予言者・フランシスコ派の修道院・貌の皮を着た酋長・儀礼における限界期の新参者達がその具現者として挙げられ、裸のキリスト・両性俱有者そして愛がコミュニタスのシンボルとなる⁽¹³⁾。コミュニタス内においては、主体は両義性を帯びたものとなり、社会文化的には仮死状態となる。この中で人は完全な平等主義を発達させ、存在そのものが重視される。又主観的・夢想的なムードにあふれ、時間は出たり入ったりし、コミュニタス的思考は、具体的・個々人に即したパーソナルなものであり、抽象は偽善として敵視される。その他、名前がない事、私有物の欠如、あい昧である事、他律的であり卑しめられると同時に聖性である事等が特徴としてあげられる。ターナーは、コミュニタスのアナーキーな性格は構造を支配する集団にとって危険な力となるが、同時にコミュニタス状況が無ければ社会の諸機能はスムーズに行なわれないとし、両者の相補性を強調した⁽¹⁴⁾。コミュニタスは、構造と構造の間の真空地帯であり、そこにあるものは、社会的に名も無く見えてはならないものとされる。この位置は、物と物の間を名指す事の禁止であるタブーによって囲われている部分と考えられる。

では、ターナーの示した反構造の諸特性は、様々なタブー現象の中にどの様に見られるであろうか、まずタブーと言う語の起源となったポリネシアの酋長を例に見て見よう。ポリネシアの酋長は、強大なマナを持つと人々に信じられており、彼の行動には様々なタブーが課せられている。酋長は地上を歩かない。酋長が歩けば地上はマナはマナの力の世界となり、人々にとって歩く事は危険な事になるからである。彼は人々の目に触れず、メッセンジャーを介して話しかけ、又彼自身、マナが集中すると信じられる頭部には触れてはならず、食事も人の手によって食べなければならない⁽¹⁵⁾。彼はタブーそのものであり、ポリネシア社会で最大の力を持つものであるが、その力は通常の権力が発揮されるのとは異なる形を取る。ポリネシアの政治的ヒエラルキーは、拒否権(タブーを課す力)のヒエラルキーである。位があがる程マナは強大になりその者に対するタブーは大きくなる。酋長は、人の例外として全社会の人々にどんな禁止をも要求する事が出来るが、タブーは一般に要求されず彼自身がタブーを自らに課す⁽¹⁶⁾。酋長の持つ力は、思いのまま濫用される方向を取らず、行使されない事によって人々を統治する。このマナの信仰に基き、その力で社会を支配する形を取らず、行使しない事がなおその力の存在を高めると言うあり方は従来の権力のあり方とは異なる。発揮されるマナやタブーは、それが頻繁である程その力は弱く、されないもの程危険の力は強いと信じられている。酋長は政治的な統治者でありながら、社会の枠外に存在する。この酋長のパラドキシカルな状況は、酋長が霊と俗の接点に居る事から生じる。酋長は、社会的には見えないものとされ、その社会の一部でありながらも、人々の意識的な世界観からは排除されている。ターナーが貌の皮の酋長を「地位なき地位」と呼んだ様にそれは一つの矛盾である。さらに構造外に居りながら、構造を支配するという形で、タブーの性質を最大限に利用しているのが、ローラ・マカリウスの分析する鍛冶屋の機能である⁽¹⁷⁾。ここでもタブーの力は逆説的な形で作用する。未開社会の多くでは、鍛冶屋

は部落にとって必要不可欠な鉄を扱うものでありながら軽蔑され、タブー視されている。これは、鍛冶屋が鉄を作る際、部落の最大のタブーである血のタブーを破り、経血や人間の脂を使ったり、胎児を埋めた場所に炉を作ると信じられているからである。しかしながら鍛冶屋は部落間の抗争を鎮める平和の使者、仲人・仲裁者という重要な任務を持つ。それは鍛冶屋が血のタブーを破り、暴力的なものを内に秘めている危険なものと信じられており、誰も彼の前では暴力をふるわないからである。マカリウスは、これを「火薬箱と信じられているものの前では、誰もマッチをすらない」と言う心理でたとえる⁽¹⁸⁾。この様に内在する力が発揮されない事によって、構造内部の対立緊張が解消されるパターンは、ポリネシアの酋長の場合と共通する。彼等の持つ力は、構造内の力や価値より優位なものとされているが、その優位性は、信仰として存在するものであり、実際においては彼等は構造的には弱者であり、社会に依存している。この最も抑制されたものが最も強力な力を託されるという、アンビバレントな力の設置は、一つの支配原理の限りない発展への歯止めとなる。通常形の政治権力は、限りなく濫用される方向を取り、社会内集団の対立がある場合その葛藤は社会解体にまで到りやすいが、その様な力とは異質の権威によつて調整が行なわれるのであれば、葛藤のエネルギーは社会解体にまで展がらず秩序は安定する。

内在すると信じられている力が行使されない事によって、社会が安定すると言うタブーの存在特性は、俗的世界と異なる世界への信仰によって初めて可能となる。この異質な世界への信仰やそれに基く畏れが失なわれた時タブーは、その構造的劣等性をのみ露わす事になり、霊的優位性を失ない、冗談関係の様な情緒性や娯楽性を持って、集団に貢献する様になる。その最も代表的な者が道化である。シェイクスピアの道化の分析を行ったヤン、コットによれば、道化の元祖はアルレキーノと呼ばれる半神であり、又妖精も道化の一種であった。それが次第にその神話性と宗教性を失

ない、職業化したのが道化である。道化は、上流社会に入って生活し、王や貴族とも親しげに口をきくが、構造的には彼はその社会には属していない。彼はその社会の規範や価値の全てをからかい、タブーを平気で口にすが、決してとがめられる事はない。それは、道化の位置が本質的にその構造の枠外にある為、彼の行動は構造への直接的脅威にはならず、構造を破壊するものではないからである。構造的に無であり、又内在力をも認められてない事によって、道化は初めてタブーを口にすることを許される。又、社会的合意によって無とされる道化は、貴族社会のインフォーマルなメッセンジャーとして、調停者として働く。道化には構造の中の者が持つ時間や場所の法則は適用されない⁽¹⁹⁾。ヤン・コットは、社会の表面上の規則（建前の事か）によって動かされている人々の面を掘り起こし、その時代に疑い様のないようなものに疑いをかけるのが道化の哲学であると述べるが、ターナーは、優越的な政治支配者に対するコミュニタスの道德価値を象徴する者と捉える。ターナーによれば、構造的に劣等でマージナルなものは、その社会の構造的主体者の提示する規範的道德（閉じた道德性）に対して開放された道德（開かれた道德性）を表現する存在である⁽²⁰⁾。ヤンコットは、道化のみが真実を語ると指摘するが、これは明示的な世界だけでなく、トータルな世界把握を道化が行なう為であり、そこから出る道化の発言は、開かれた道德性（人間に対する全的理解）を志向すると考えられよう。しかしこの道化のオープンな行動と認識力は、社会的には全く無力であり、彼の位置は職業化し、その哲学と職業の分裂は、道化を内的矛盾に満ちた者へと追い込む⁽²¹⁾。宗教的な力を最早持たない道化やタブーはその政治的影響力を失い、形骸化し、従来タブーがある事で守られて来た世界観を崩壊させ、社会解体への一步となる。

道化・鍛冶屋・酋長は、どんなに構造外のものとして規定されようとも、その社会の人々の世界観の一部である。しかしながら、その部分は、主観的な判断に従えば見えない部分であり、又情緒的忌避行為によってそ

の存在は仮に否定され排除されてしまう。この社会的合意が人々の意識された世界観であり、人々がそれに依って生きる虚構の世界である。その虚構性は、異なる世界観に触れる事がなければ、露否する事は無い。タブーは、この構造の限界性を露わす事なく、維持しようとする意志に基くものであり、それは社会の真の構造や本質である矛盾性をカムフラージュするものである。道化のみが真実を語るとヤンコットは述べるが、人々の意識的な世界観に属さない部分を加えて初めてトータルな世界の把握が可能になるからである。このタブーの世界は、人々には、はっきりと意識されていなくても、構造や明示的な体系と緊張関係を成しており、構造維持の原点となっている。次に内的矛盾に満ちたタブーがある事でどの様に世界観の虚構性が守られるかを、タブーに対する人々の心理的な態度を中心に見て行こう。

個人の心意の中のタブー

タブーは情緒性を抜きにしては論じる事が出来ない。タブーを守る宗教的、道徳的行為は、理性的な自覚に基くものではなく、怖れ不安、嫌悪等の感情に支えられたものである。タブーに対する人間の心意の分析は、ルドルフ・オットーの「聖なるもの」の分析の中に幾つか見られる。オットーは、キリスト教的要素を除いた「聖性」、神秘的なものに対する人間の感情は、自然的恐怖と異なる「畏れる」と言う人間精神の新しいカテゴリー入るものであるとした。オットーによれば、「畏れる」という経験は、(一)奇怪なるものを発見し(二)そこに背理的なものを感じ(三)さらに二律背反的な矛盾の自覚を持つというプロセスを経て達成された聖性＝絶対他者性に対する絶対汚わいの感情である⁽²²⁾。彼の提出した、完全に聖なるものに対しての自己の不完全性、けがれという最終の段階はきわめてキリスト教的であるが、その中間段階は、未開社会の様々なタブー現象に適用され得る。未開社会の宗教は、至高神の存在を認めても、その神は宗教生活や儀式には、ほとんど登場しないという事実がある。さらに、至高神の消滅は

宗教生活の貧困化という形を取らず、かえって豊かな宗教文化を生じる⁽²³⁾。彼等の宗教エネルギーは、自然現象や祖先の霊や、日常生活に密接な関りを持つ半物半霊に集中し、それ等とのコミュニケーションが主な宗教行為となる。そして宗教的タブーは、全てそれ等に関するものである。タブーの対象が、絶対他者でなくあいまいな両義的なものである場合、キリスト教的な宗教経験とは全く異質なものとなる。キリスト教的宗教経験は、石津照璽によれば、他者的な経験、すなわち主体の中に主体を拒否するものがあるという経験であり、人生の限界状況において、この人間の実存に備わる欠陥＝他者性が露わになった時、その実存の母体の構造を捨ててしまい、絶対者にそれを託し自己を無にする事が宗教的態度である。これは、主体の意識である人間の我、自己防衛保存の為の道德律、価値観を含めた世界観の限界性を認めそれを捨てる事である。石津は主体にとって限界状況の経験は、「あれであればそれでない」という取りとめの無さであり自分を十全に規定出来ないあいまいさとして捉えられとされた⁽²⁴⁾。石津は、この実存の流動性を発見し、この矛盾の解決を矛盾なき完全なる他者の意志へあづける事が宗教的であるとし他者性の発見と、一体化を経るに当たっての情緒的緊張を負自の構造として分析する。宗教的とは存在自体に負自を感じる事であり、自己の不完全性の認識に基づく⁽²⁵⁾。これに対して、未開社会における聖性、他者性は危険という形でまづ捉えられ、聖性には両義的なものが当てられている。石津は宗教的心意と呪的心意の差を次の様に説明する。宗教的心意が、自己の、社会の不完全さを認識し情緒的レベルで、これ等を放棄するのに対し、呪的心意においては、媒介者を自己の力の足りない部分に、それが空想の産物であれ付け加え、自己を保持しながら適応する⁽²⁶⁾。人間の限界の裂け目に媒介者を設置する事は、人々は自己の実存の欠陥等を認識しなくても、欠陥故に生じる不安のみを媒介者に託せば良く、人の実存の構造や世界観の有り様は問われる事なく、情緒的緊張処理がなされるという事である。媒介者の両義的性格によって、自

己と他者の裂け目は埋められ、人は自らを肯定しつつ、自らの構造の不十分さと限界を知る事なく、他者の世界を手に入れる。聖なるものが、けがれやアンビバレントな性質を持つ未開社会では、それ等が自己の矛盾や不完全さの産物であるのにもかかわらず、その事は意識されず、異質な世界への媒介者として、不安のみがそこに託される。ダグラスは、未開社会の世界観は、経験を一つ一つ結合させたものから成り、狭い社会の経験的な独断から生じる秩序を守る為にけがれがあると述べる。その考え方によれば、地震、日蝕、奇型、等の異常や偶然は、西欧の文明の様に例外、原理が不完全な形であらわれたもの、又は原則の成り立ちに欠陥があったものとして捉えられず、世界を脅かす悪意ある意志と考えられる。経験的世界が傷つけられやすい場所に、彼等の秩序を守る為に、けがれやタブーが発生し、それに触れぬ事によって世界は安定した姿を維持する。経験的な世界は、主観的な判断の積み重なったものであり、常に自己を導く概念に再考の余地を残し、より正確な世界像を作る為には、前説を作りかえ、否定したり出来る様な科学的な態度によるものとは異なる⁽²⁷⁾。自己否定により完全さを求めるのではなく、自己の経験の肯定を拡大して、安定した世界を求める。従って、ここでは、自己の判断や経験を再考させる様な出来事は、積極的に取り入れられる事なく、安定を崩すものものとして、怖れられ危険なものへの敵意と言った情緒的な反応で迎えられる。

自己の内なる不完全性、けがれ、タブーとなるべき部分を認識する事から、さらに聖性を求める心理は、内にアナーキーなものを既に含んでいる為、異質なものに会っても完全な世界観の解体にまでは到らない。それに対し、自己の内の欠陥や矛盾を不完全性と認識せず、そこに異質の原理を与えて従来の世界観を安定させようとする心理においては、一たびその異質とされた部分はその力を失った場合、矛盾的要素が無く安定したとされていた世界観は経験的、無意識的である為、完全な解体を惹き起される事が多い。全ての行為は意味を失ない、道徳的行為は、その裏付である前

提を失なう。タブーと世界観の虚構性は、密接な相関関係を持ち、タブーを守る事で人は世界観の不完全性に直面し実存の流動性を意識する事なく生活を送る事が出来る。その生活は安定し固定化したものであるが、見ない・聞かない・言わない等の様な様々な忌避行為によって成り立っているものであり、常に新しい世界や動きは危険で不安なものとして解される。しかもタブーを守る事で、安定を維持している虚構世界は、意識的、主体的に選んだものではない為、自覚された意味を持たないものである事が多い。意味と、構造を明確にしない経験的世界は、最も解体を惹き起しやすく、タブーが強化される程、構造は安定するが内的流動性を失い完全な社会変動やカストロフィーを生み出す素地となる。タブーに対して、疑いをかける事は、自己の経験世界に意味と自覚を与える事になり、強力な忌避行為によるよりは、はるかに構造の安定を生ぜしめる事となる⁽²⁸⁾。

註

- (1) Winick Charles *Dictionary of Anthropology* Little-field, Adams Co. Totowa New Jersey 1970 523 頁
- (2) Leach, E. R. *Anthropological Aspects of Languages: Animal Categories and Verbal Abuse*. Lenneberg E. H. (ed) *New Directions in the Study of Language* Cambridge 1964
- (3) ブロニスロウ・マリノフスキー「未開人の性生活」泉靖一・蒲生正男・島澄訳新泉社 1971
- (4) マリノフスキー 同書 112 頁
- (5) メラリー・ダグラス「汚穢と禁忌」塚本利明訳 思潮社 1972 第3章
- (6) ダグラス 同書 232 頁
- (7) ダグラス 199~201 頁
- (8) マリノフスキー 前掲書 第6章 社会的父子関係の強調
- (9) 牛嶋巖 母系制下における父族の霊的重要性「現代諸民族の宗教と文化」古野清人古稀記念論文集 1972 年 社会思潮社
- (10) Radcliffe-Brown *Structure and Function in Primitive Society* Cohen and West Ltd. London. 1971

- (11) ラドクリフ・ブラウン 同書 95 頁 102頁
- (12) Turner V. W. *The Ritual Process—Structure and Anti-Structure*
Aldine Chicago 1973
- (13) ターナー同書 125 頁
- (14) ターナー 127—129 頁
- (15) フランツ・シュタイナー「タブー」井上兼行 訳 せりか書房 1970 51—
53 頁
- (16) シュタイナー 51 頁
- (17) Makarius Laura *The Blacksmith's Taboos, From the man of Iron
to the man of Blood. "Les tabous du fergeron"* から英訳 Diogène
No. 62 1968
- (18) マカリウス 30 頁
- (19) ヤン・コット「シェイクスピアはわれらの同時代人」蜂谷昭雄 喜志哲夫訳
白水社 1973 160—192 頁
- (20) ターナー 前掲書 109—111 頁
- (21) ヤン・コット 160 頁
- (22) ルドルフ・オットー「聖なるもの」山谷省吾訳 岩波文庫 1968 50 頁 93 頁
- (23) Horton, Robin *Ritual Man in Africa. Reader in Comparative Reli-
gion (An Anthropological Approach)* Lessa W. A, Vogt E. Z. (ed)
Harper and Row N. Y. 1965 353—54 頁
- (24) 石津照璽「宗教哲学の場面と根底」創文社 1969 10・12 頁
- (25) 研津 同書 55 頁
- (26) 石津 同書 53 頁
- (27) ダグラス 前掲書 341 頁
- (28) 本論文は、修士論文第一部の抄訳であり、現代の女性問題を分析する為の方
法論としてまとめられたものである。

The sociological analysis of the phenomena of taboo.

Kumiko Uchino

The phenomena of taboo is an inevitable product of the culture which has an integrated point of view. The objects and actions regarded as taboo are deeply related to the orthodox and normal behavior of the society, although they are always believed to exist exterior to the daily life in the society and of people's conscious perspectives. Emotionally people behave as if taboo objects did not exist and avoid them carefully, never confronting them objectively. However, once a taboo is broken, new spheres of reality in the universe appear in front of them. People can not help but be overwhelmed and their firm belief and the established horizon of the world at once collapse. If one accepts this new dimension which was formerly refused, its acceptance induces the reformation of the world.

In the transition of an era, taboos are easily and intendedly broken. They are discussed in public or made use of as ritual propaganda by revolutionaries. The breaking of taboos and the resultant mental instability and emotional confusion are frequent tactics used for or against maintaining the rigid order of the regime. It is very meaningful to analyze the interrelation of taboo and social structure and its influence on people's consciousness, for it enables us to approach a total understanding of the world in which we live.

In primitive societies, something abnormal and contradictory to the secular order is regarded as sacred and as belonging to another world. The structural contradiction of the society is never questioned and is placed in a spiritual realm guaranteed by people's avoidance. Taboo phenomena, accompanied by this emotional avoidance, functions to stabilize the present social order. The phenomena of

taboo is the dogmatic procedure to prevent the exposure of the deficiency of a world view by giving it religious value. Taboos were considered very religious matters and even today are discussed on a moralistic level. This means that they do not allow people to question their validity, but force them to believe in a fiction that gives rigidity to their society.